

「品のないクレーム」に悩む ～キャリア教育にも通じる、あるお笑い芸人の話より～

「おい、ゴミ屋どけよ！」と言われたことがある。ゴミ清掃車が道を塞ぎ、通り抜けられないことに腹が立ったのだろう。そんな場所に限って細かく集積所がある。待たせてはいけないと思って、ペコペコしながら、なるべく急いでゴミを回収する。心から悪いなあと思うも、この1本道を抜けるまでは仕方がない。休まず手を動かし続ける。

チラッと後方を見ると、小さな渋滞となっている。瘦れを切らした人が車から降りて、僕らのところまでやってきて直接文句を言った。

「おい、ゴミ屋どけよ。ゴミ屋がなんで俺を待たせるんだよ。ここに並んでいる奴、全員そう思っているぞ！」

僕はいつも、「すみません」とは言わず、「ご協力ありがとうございます」と言うように心がけているが、ピンチ。いつも言っていないので、とっさに「すみません」という単語が出てこない。先輩清掃員が、僕の後ろで「すみませんって言え」とささやくので、「すみません」とオウム返しをして頭を下げた。

僕はここで言われた言葉を、「ゴミ清掃をやるような連中が一般庶民を待たせるなんて、どういうつもりだ？」というような意味にとらえた。

こういうことは年に数回ある。他にもこういう人もいた。

「おう、ゴミ屋、おおう、ゴミ屋よおー、どこに目をつけてるんだよ。ここにゴミあるだろうがよおお！」私にそう呼びかけてきたのは、その地区の住民だった。

こっちは粗大ゴミ回収に伺い、品物が見つからないので、チャイムを押しただけである。

「ゴミ屋がなんでゴミわかんねえんだよ？ゴミ屋のくせによ！ゴミ屋が俺の時間を使うんじゃねえよ」

前述の男と並べて、どちらの気炎の方が優勢か比べてみたいほどだったが、意外とそのときには冷静に観察していた。売り言葉に買い言葉であれば、こちらもヒートアップして腹も立つだろうが、出会いざまにマックステンションだと呆気にとられる。こういうとき、僕はどうしても人間の品定めをしてしまう。品格と言ってもいいだろう。感情が振れたときにどういう言葉を使うのが、その人の根っこのような気がする。

2人の言葉の中に潜んでいる内面意識を読み取った。それは、職業の序列意識だ。

彼らは怒鳴ることで、鬱積したストレスを発散させるが、なるべくならこの清掃員に致命傷を与えたい。自分の思いつくボキャブラリーの中で最も汚い「ゴミ屋」という言葉で罵ろうというのが透けて見えた。

普段、僕らは自分達のことを指すときに「ゴミ屋」と呼ぶが、この職業に就いていない者がそう言う場合には、こちらを踏みにじろうとする意図が見える。

しかしながら、おばあちゃんがゴミを持って「ゴミ屋さ～ん、待って～」と言われても全然腹が立たないから、言い方と文脈ではあることは付け加えておきたい。

おばあちゃんが「ゴミ重いから持って行ってよ～」というのはよろこんで運ぶ。困っていることがあれば、手助けするのは僕らとしても嬉しい。人の役に立つってやってみると楽しい。

これはゴミ清掃だけの話ではない。仕事の内容とそれに見合った報酬を何の引け目もなしに、堂々と受け取れる時代にしたいと思っている。

滝沢 秀一 :ゴミ清掃員、お笑い芸人

ご存知の方も多いと思いますが、学校では、「キャリア教育」という学習に、取り組んでいます。

「将来どのような職業に就きたいか」ということが大きな目標の一つとなります。小学校を卒業した子供が「将来就きたい職業」は昔と比べると大きく変化してきています。また、保護者が就かせたい職業と子供の希望とはかなりの相違があるようです。

「働くこととはどういうことか」「将来のために、今、何をしなければならぬのか」という根本的なことについて、この夏休みの中で、ご家族の話題の一つにさせていただければと思います。

最後になりますが、「感情が振れたときにどういう言葉を使うのが、その人の根っこのような気がする。」という言葉が、強く印象に残ったお話でもありました。